

『異端児の夏』

プロローグ

日本列島は、その昔、大陸と陸続きであったが、長い時間を掛けて現在のような太平洋北西部に浮かぶ、海で囲まれた海洋国家となった。余り知られてないが、日本には大小、併せると六千以上の多くの島々がある。ただ、その大半は無人島で、実際に人が住んでいる島となれば、四百位と言われている。そして、その四百の島々のうちで、特に大きな北海道、本州、四国、九州を主要四島と呼んでいる。

主要四島と呼ばれるように、本州の周りも当然ながら海になる。むろん北海道、四国、九州も、また、それぞれが海によって隔てられた島である。しかし、近年の目覚ましい技術発展は、いつしか本州と他の三島、全てを橋や海底トンネルで陸続きに変えていた。

北海道と本州との間には津軽海峡が横たわる。その海峡の海底約百メートル下には青函トンネルが掘られ列車が走る。

本州と九州を仕切るのはわりと幅の狭い関門海峡かんもんかいきょうである。この海峡の一番狭い場所であれば、本州と九州の距離は約七百メートル。距離が短いという事もあってか、この海峡には一つの橋と三つの海底トンネルがある。

東側には山口県新下関駅と福岡県小倉駅を結ぶ山陽新幹線用海底トンネルがあり、その西側には自動車や人が通れる上下二重構造を持った関門国道海底トンネル。その近くの海上には橋長約一キロメートルの関門橋があり、関門橋の西には下関と九州門司を結ぶ山陽本線が走る関門海底トンネルがある。

本州と四国はどうかと云えば、ここには風光明媚な瀬戸内海が横たわる。ここには海底トンネルは存在しない。しかし、瀬戸内海に点在する小島などを橋で結び、三つのルートによって本州と陸路を形成して、車や列車を走らせている。

東から神戸鳴門ルート、中央に広島県と香川県を結ぶ児島坂出ルート、西には山口県と愛媛県を結ぶ尾道今治ルートおのみちいまはりが、それらである。

今では、この様に北海道、九州、四国はすべて陸路によって本州と結ばれ、陸上交通が可能となっている。しかし、これら土木工学の粋を極めて作った橋やトンネルも壊せば、いつでも海により隔てられた四つの島に帰す事ができる。いや、橋やトンネルと云う限られた空間に作った人工構造物は壊す必要もない。そこに交通を遮断しゃだんしようとする意志を持った者が現れれば、その形状からして交通の遮断は容易にできる。

交通の遮断、それは実質的に日本を海により隔てられた、四つの島に戻す事でもあった。

第一章 古い友人

一

東京は、良く晴れた一日であった。しかし、予報では、そろそろ梅雨に入るとテレビが言っていた。まだ先だろうと思ひながら沢木洋介さわきようすけは、沈みかけた太陽が残る西の空をみた。都内のある農機開発メーカーに勤める洋介は、仕事が一区切りした為に、六時くらいに会社をでた。六月の初旬ともなれば日はだいぶ延びている。この時間になっても周囲は明るい。洋介自身、明るいうちに会社を出るのは久しい。その洋介に、友人の城島から電話

が入ったのは数日前であった。

城島祐司きしまゆじは、洋介の古くからの友人で警察庁に務めていた。お互いの勤務先が近い事もあり時折、会っては酒を酌み交わすなどして、今でも親交は昔と変わらない。

昨日まで洋介も忙しかった。だから城島に会うのは今日にした。城島は自ら誘った手前か、今日で良いと返事をした。しかも洋介の退社時間に合わせると城島から述べてきた。

洋介は、そのとき微かな戸惑いを覚えた。城島は日頃から多忙極める男である。勿論、人間は働き尽くめではいられない。たまたま時間がとれたのかも知れない。しかし、こんな早い時間で構わないと言うのは、やはり少しおかしいのであった。

洋介は駅へと足を進めた。四つ先の駅で電車を降りた。待ち合わせをした居酒屋に入ると、先に城島はきていた。やはり単なる誘いではないなと思ったが、しばらくは他愛のない話を続け、酒を酌み交わしていた。

「何かあったか？」

頃合いと見た洋介が城島に言った。その辺は阿吽の仲でもある。城島も、そうだなと素直に頷くと、洋介の知人である田之上孝作たのうえこうさくについて聞いてきた。

城島が田之上について聞いてくる。どうしてだろうとの思いをしながらも、しばらく振りに聞く田之上孝作の名前に、洋介は昔を思い出していた。

洋介と田之上が同じ大学に通っていたのは、今から十七年前になる。当時の田之上は長身の痩せた男で、一重の切れ長の目をした、もの静かな感じの男であった。

大学に入学して間もなく、田之上が隣の席に座ったのがきっかけとなり二人は親しくなった。最初に田之上を見たとき、ずいぶんと落ち着きを持った男に見えた。その洋介の感覚は間違いはなかった。

田之上は、長崎県の小さな漁村で生まれたが、父親を早く海で亡くしていた。そのため高校を出ると二年間働き学資を作り、それから大学に入っている。従って学年は洋介と同じでも年齢は二つほど上であった。

一方の洋介は普通の家庭で育ったので、田之上のような苦労はなかった。しかし、兄弟も多かった事から、大学に入ると生活費は自ら稼ぐと決めていたので、入学が決まるとすぐにアルバイトを始めていた。その洋介も茨城で漁業の盛んな那珂湊というところで、生

まれ育ってきた。

生まれが同じ漁業の町で、生活費を稼ぎながらの学生生活など境遇が似ていてか、二人は急速に親しくなった。ただ、それも長くは続かなかった。洋介が田之上から離れる原因になったのは、大学二年生の秋頃、田之上がバイト先で知り合った女性の資金援助を受け、学業に専念しているのを知ったのがきっかけになる。資金援助を受けていた女性は、田之上が、その年の春からアルバイトでボーイをしていたキャバレーに勤めていた女性であった。

当初、キャバレーに勤めていると聞かされたときは、大丈夫なのかと心配にもなった。それは、明らかに職業に対する偏見でもあったが、洋介にしても當時は、まだ二十歳前後の多感な時期にあったのだから、そのイメージに捕らわれたとしても仕方なかったと言える。しかし、田之上の連れてきた娘は、気だての良さそうな娘であった。それで洋介の心配はなくなった。その後も、何度か田之上の部屋などで、その娘とは会っていた。

田之上は当時から常識を無視したようなところがあり、それが却って洋介には自分などより遙かに大人に見えていた。そこからすれば、如何にも田之上らしい選択に、心の中で

二人を応援もしていた。ところが、その後の田之上の話は頂けなかった。田之上は自分の能力を高めるには、金が必要だ。娘は、その為の金蔓だとはつきりと口にしていた。それには何か裏切られたようで、洋介は田之上に失望を覚えた。

もっとも、その娘の事だけが二人の間に溝を作ったかと言えば、それは嘘になる。娘の件は一つのきっかけに過ぎなかった。それよりも、田之上との付き合いが深まるにつれ、田之上の傲慢な考え方や身勝手な性格に、ついて行けないと感じていた。事実、大学二年の初め頃には、洋介は田之上と距離を起き始めていた。

それでも田之上とは、其れなりの付き合いは続いていた。しかし、その後しばらくすると田之上は、大学卒業を待たずにアメリカの工科大に進路を変えた。そこで田之上との付き合いは途絶えた。

「そうか、今は田之上とのつき合いはないのか？」

「ない、田之上さんがどうかしたのか？」

「田之上は七年前に日本に戻っている。しかし、その後の消息が掴めない」

「消息が掴めない？ 田之上さんが何かしたのか？」

「いや、そういう訳ではないが」

少し困ったように、口元を歪めて城島が洋介をみた。

「じゃあ、何故、田之上さんについて聞く？」

城島と洋介は違う大学を出ている。城島と田之上の間に直接的な接点はない。田之上の名に懐かしさを覚えながらも、どうして城島が田之上について聞いてくるのか、疑問であった。

「俺は、前々から田之上という人物に興味があった。あの男はアメリカの軍事産業とも結びつきを持つ男だからな」

「お前、警察の何処にいるんだ？」

城島が前に居たのは警察でも公安部であった。公安は、水面下の活動が多い場所のために、城島は洋介にさえ、公安に居た話はしてなかった。ただ、友人の間柄である。長くつき合っていれば話の節々から、そのような部署に居るのだろうとの想像は、洋介にもあった。

「今は、警察からの出向で内閣官房情報調査室にいる」

内閣官房情報調査室は、情報の収集や分析などを役割とする内閣組織の一つになる。その仕事の特性から警察の出向者も多くいるセクションでもある。

「すると政府は、田之上さんが、何かやらかすとも考えたのか？」

「いや、政府は関係ない。俺が個人的に調べているだけだ。田之上がアメリカで研究していたのは水素個圧燃料だ。それによって幾つもの特許を取得している」

水素個圧燃料、それも久々に耳にする名称であった。田之上が水素個圧燃料を完成させたのは、だいぶ前であったと記憶していた。

「そう言えば、まだ世に出た話は聞いてないな」と洋介が小首を傾げた。

「それも、おかしい。すでに実証試験も済んで商品化できる筈なのに、未だに世に出してこない」

「なにか問題があったのか？」

「いや、俺の調べた範囲では、なんの問題もない筈だ」

「そんな事も調べていたのか？」

「水素個圧燃料は軍事に応用できるものだ。当時の日本政府も、それに気づき田之上が、

アメリカに居たとき日本への帰国を促した。もともと田之上は応じなかったが」

過去、政府と田之上の間に、そのような経緯があったと知り、城島が田之上に関心を寄せていた理由が洋介にも、やっとわかった。

「国も身勝手だな。そういう優秀な研究者が海外に流失するのを防ぐ努力もせずに、何か海外で功績を挙げたら呼び戻そうとする」

「そう怒るなよ。俺も、一応は国の人間だからな」

「そうだったな」

「――洋介だから話す。実は、去年の夏に田之上が、政治論評をネットに書いた。その中で七月七日、日本が大きく変わると書いている」

「田之上さんがネットに？」

頷いた城島は、「これが、そのときのものだ」と言いながらバックから数枚の用紙を取り出し、洋介に渡した。洋介は、しばらく田之上のホームページをプリントアウトしたものを読んでいた。

顔を上げた洋介が言った。

「三月に誕生した楠田新政権を、去年の八月には予測していた」

昨年の夏といえば、特に政治に大きな混乱は起きてなかった。当時の林原内閣はやしばらは、支持率が高いという訳でもなかったが、大きな失策をすることもなく、堅実に国会運営をしていたので、それなりに評価は得ていた。このまま今年十一月の総選挙は林原の元で戦うというのが、当時の与党自由遊民党の既定路線と言われていた。しかし、昨年の年末あたりから、ある大臣の汚職に絡む退陣と不透明な党運営費を巡るゴタゴタから政権は大きな異痛手を受け、ついには今年三月になつての楠田内閣誕生につながっている。

政治情勢の急変は昨年の暮れからになる。そうなると昨年の夏に楠田内閣誕生など、たとえ政治評論家と称する人でも予想は極めて難しかった。それでも、田之上は楠田新政権誕生を予見していた。ただ、洋介はそれには驚かなかつた。多彩な才能を有する田之上が本気で調べれば、その辺の政治評論家に負けたりはしないとの気がした。

「誕生から三ヶ月しか過ぎてないのに、もう、楠田内閣では持たないとの声が党内から漏れている。田之上が弱体内閣の誕生と書いたとおりだ。田之上の分析は鋭いな」

「相当入念に調べたのだろう」

「俺は政治の話に興味はないが、嫌なのは文書の後半だ。日本は一度、力によって変わらなないと駄目と書いてある。何か臭わないか？」

田之上の性格はよく知っている。昔から一度口にした事は成し遂げるのが田之上であった。その田之上が政局を調べた上で、力という言葉を使ったとあれば、洋介にしても穏やかな印象は持てなかった。

「田之上さんは、目立つのを好まない人なのに、どうしてネットなんて使ったのだろう。何か目的があるのかもな」

「やはり、洋介も気になるか？」

洋介が小首を傾げた。やはり気になるようであった。

「ネット上の書き込みは偶然に見つけた。そこから田之上の所在を掴もうとしたが、ネットも海外経由で掴めなかった」

「城島が調べても、所在がわからないとはな……」

「そう、だから尚更気になる。そうになったら、俺の立場ではほうともおけないだろう」

「まあ、お前の立場は別にしても、田之上さんが帰国後消息不明なのは少し気になる」

「だろう。当時の政府としても、何が何でも国と関われと言った訳ではない。国内に戻り民間企業で活動しても何の問題もなかった。ところが帰国から七年も経つのに、いまだに国内での田之上の活動が全く伝わってこない。――俺は、元々警備局の人間だ。下には公安もいる。公安が調べられないとなると、相当、田之上は用心して身を隠して居る。おかしいだろう、どうして、そこまで身を隠す必要がある」

田之上は七年も前に日本に戻って来ていた。田之上は可成り著名な男である。その男を、城島が公安という警察組織を使い調べても、所在さえわからないとなれば確かに奇妙ではあった。とはいえ、それだけでは、洋介にしても何とも答えようのない話であった。

「とにかく一つだけ田之上さんについて言える」

「何だ」

「彼は天才だ。良きにつけ悪しきにつけ天才だ」

「――わかっている。だから、こうしてお前から話を聞いている」

それは七月七日の夜明け前、瀬戸内海に架かる瀬戸大橋から始まった。

坂出警察署の警邏隊である吉川と倉田は、本部から奇妙な連絡を受け、瀬戸大橋に向けヘッドライトを灯した車を走らせていた。

瀬戸大橋は本州岡山県と四国香川県を結ぶ、眺望豊かな瀬戸内海に架けられた吊り橋で、海峡部だけでも九・四キロメートルある。自動車道路としては約三七キロメートルで四車線を持つ。昼間であれば美しい海上景色も眺望できるが、夜明け前とあって橋の周囲には暗い闇だけが広がっていた。

吉川達は一般道から大橋に到着すると、そのまま街路灯に照らされた長く続く大橋にパトロールカーを進めていた。

「いったい何が、この道路を走っているんだ」

助手席に乗っている倉田が吉岡に話しかけた。

「本部無線ではなにか奇妙なものが、岡山方面に移動している。それだけです。何のことがさっぱりです」

吉川が困惑したように答えた。そのような会話をしながら、パトカーを進めるうちに車

の数が増えてきた。明け方前、一日のうちで一番交通量の少ない時間帯であるに関わらず車の間隔が詰まってきた。この先に何か居ると二人は感じた。サイレンを聞いた車が道を譲るために、違う車線に入る。その横を走り吉川は車を前へと進めた。吉川の運転するパトカーが車列の先頭にでた。

吉岡と倉田は自分達の目を疑った。奇妙な形をした物体が、整然と隊列を組み道路を進んで行く。形は馬のように見える。しかし、色は鈍い銀色。金属製であるのは、すぐに見てとれた。

二人は一瞬顔を見合わせた。お互いの顔が奇妙に歪んだ顔に見えた。二人に言葉はなかった。

その物体の移動速度は時速百キロくらいである。パトカーのスピードメーターが、そのように語っていた。吉川は、しばらく、その物体の後ろをついて走った。

「映画、映画の撮影でもしているのか？」

倉田が不安そうに言葉を発した。前を走る物体は、どう見ても馬のような形をした金属体である。四つの足を器用に動かして進んでいく。しかも早い。良くできていると思った。

集団の先頭までは見えない、相当の数が居ると思った。

「倉田さん、署に連絡をしましょう」

「そうだな」

倉田は、マイクを掴むと署の情報センターを呼び出した。

「映画撮影の許可は出てないとの事だ」

「映画ではないと……」

前を走る銀色をした動物型の金属体、本物の馬より一回りは大きいと思った。その事を本部に伝えた。

警察本部から手出しは無用、そのまま岡山県警に引き継ぐ、追尾だけ行うようにとの指示が倉田達に入った。すでに周囲には応援のパトカーも集まりだしていた。

倉田達の車は、ひついし島付近まで追尾を続けていた。香川県と岡山県の県境は、その先にある下津井瀬戸大橋上にあたる。すでに橋の上には岡山県警のものであろうか、赤灯が見えていた。

一方、香川県警から不思議な物体が岡山に向かっているとの連絡を受けた岡山県警は、

事情をよく理解できないまま巡回中のパトカーを、現場に向かわすとともに交通機動隊にも出勤を命じていた。

一足先に下津井瀬戸大橋に着いたパトカー搭乗員には、そのおかしな物体の後を香川県警のパトカーが追尾していると知らされていた。それなら道路封鎖をしても交通の安全は図れると考え、香川県との県境に位置する下津井瀬戸大橋の中央付近に三台のパトカーを止めて、おかしな物体が来るのを待った。

まもなく、その物体は近づいてきた。次々に不思議な物体が列をなして近づいてくる。そこにいた警官の誰もが、その光景に目を見張った。

高速道路の街路灯に照らされた、その一団は走行を妨害するために停めてあったパトカーに近づくと素早い動作で、わけもなく車両の上を走り抜け、何事も無かったように進んでいく。

そのとき一人の警官が道路の片隅で、大きな声で叫んだ。

「ロボットだ！」

それは紛れもない体長三メートルに近い動物の形をした機械の一団であった。奇妙な機

械の隊列は続いていた。我に返った一人の警官が銃を構え、走り去ろうとする一団に向かって撃てと叫んだ。周りの警官もそれに応じ撃ち出した。カーン、カーンと乾いた音が辺りに響いた。警察の撃った銃弾は奇妙な機械に当たっている。しかし、その一団は平然と橋を進んでいった。

遅れて下津井瀬戸大橋に到着した岡山県交通機動隊が、橋の出口付近に大型車両を動員してバリケードを築き、ライフル隊が銃を構え待ちうけた。

すでに明け方四時を過ぎた。この時期は、一年で一番夜の短い時期にあたる。晴れていれば周囲には、そろそろ青みを帯びた透明の空が、広がりだしても良い時間であった。しかし、空は厚い雲に覆われているのだろう。いまだ周囲は暗い。

パトカー突破の僅か後に異様な物体は、県警機動隊の前に現れた。現場指揮官の射撃命令が飛ぶ。一斉にライフルから銃弾が放される。カーン、カーンと辺りに乾いた金属音が響いた。その中を謎の物体は平然と進む。

そのとき先頭の数台から何かが発射された。バリケード用として道路に並べていた大型車両の一台が炎に包まれた。近くにいた警官達が道路上を逃げまどう。謎の物体は火に包

まれた車両の間を悠々と進んで行く。その中で最後尾につけていた四騎だけが、橋の上に残った。

機動隊のバリケードを突破した集団は、瀬戸中央自動道を進み、岡山自動車道に入ると山間に囲まれ賀陽インタチェンジで高速道路を降り、周囲の山中へと姿を消した。

この異変は瀬戸大橋だけでは終わらなかった。同じ頃、本州四国を結ぶいまばりにし今治西ルートと淡路島にかかるあかしかいきょう明石海峡大橋にも、奇妙な物体がそれぞれ四騎現れ道路を占拠すると交通を遮断した。これらの場所では、強引に突破を試みたトラックなど数台が破壊され周辺は大混乱となっていた。連絡を受けた警察は、すぐに大橋の通行を禁止して上層部の指示を待った。

夜明けとともに高松や徳島のローカル放送局が、四国四県は七月七日をもって日本国から独立をしたと、何度も繰り返し放送をおこなった。その放送は本州の一部でも聞く事ができた。

七月七日、早朝から総理官邸には閣僚達が招集され日本政府は、緊迫した朝を迎えてい

た。

政府関係者は四国四県と連絡を取るため早朝から県庁に電話をした。県庁に早朝から出ていた職員とは連絡がついた。その職員達からはとくに四国に変わった様子は見られないと告げられ啞然とした。国側は対応に出た県職員に、すぐに知事と連絡をとり調査を行うように伝えた。

早朝とはいえ、知事とすぐに連絡がつかないのも、普通に考えればおかしな事ではあった。政府はじりじりとしながら四国からの連絡を待った。八時半になった。知事が登庁しても良い時間である。政府から再び県庁に連絡を入れたが、八時半を過ぎると突然、四国の県庁とは連絡がつかなくなった。

四国にある四県庁と連絡のとれなくなった事に驚いた政府は、楠田圭太郎総理大臣を本部長とした政府危機対策本部を官邸に設けた。

政府危機対策本部の中には怒号が飛び交っていた。

「どのような事だ！ 全く四国と連絡がつかないとは。四国が日本から独立？ 日本は治安国家だ。そのような事が許されると思っっているのか。即刻四国の全知事を解任しろ！」

「大庭大臣、落ち着いてください」

「独立宣言した四国は、全て、何者かによって統制が計られたと見るべきです」

「統制が計られている？」

「はい、既に放送局は占拠されている模様です。県庁だけでなく、四国の警察も自衛隊も、こちらからの呼びかけに応答しません」

「県庁だけでなく、警察も自衛隊も……」

「可成り周到に準備がされていたように思います」

そこに集まっていた、政府高官らに明らかかな困惑が現れていた。

「相手が何者か、わからんのか！」

「……今のところ、全くわかりません」

「警察車両がおかしな物にやられたと言う。それは、どうなっている」

「動物型をしたロボットのような話です」

「総理、その件で自衛隊派遣要請が岡山県知事から入っていますが、どのようにしますか？」

「自衛隊の要請が来ているのですか？」

「はい」

「警察では処理できないのですか？」

「早朝、岡山県警が築いたバリケードが簡単に突破されています。状況からして警察では無理と判断をした様子です」

総理大臣が周りの閣僚の顔をみた。頷く閣僚の姿があった。総理も仕方ないのかと頷きを見せた。

「幕僚長ばくりょうちやうを呼んでください」

自衛隊派遣を決めた政府は現状確認のために、民間などに依頼し四国との連絡のつく場所から情報を得るために動きだした。

羽田を朝一で飛び立った四国高松行きや松山空港便が、四国への着陸を許可されず、四国から近い本州の岡山空港などに着陸をしたとの連絡が政府に入った。時間が経過するとともに、四国が本気で独立を企てたのは誰の目にも明らかになってきた。それなら現在、

橋を占拠しているおかしな物体も四国側で送った物となる。

そのころ内閣情報調査室の城島も、四国で起きた事件についての情報収集にやっきになっていた。

まもなく四国臨時政府と称した場所から、正式に日本政府に対して七月七日、四国四県は、本日を持って日本政府より独立をしたとの通達があった。同時に本州と四国間の大橋による通行に関しては、本州から四国に入る事は全面的に禁止するが、四国から本州に向かう車は七月十五日まで許可すると日本政府に伝えられた。

その発表より早く橋には、すでに本州に向かう人々の車列ができていた。おかしな物体の横を通り抜けてゆく車の列に、日本政府が自衛隊を派遣したときには、おかしな物体を破壊できる状況ではなくなっていた。

三

その夜の出来事であった。

朝から梅雨空に覆われどんよりとしていた東京は、夕刻から降り出した雨が、次第に雨

足を強め、夜には激しい雨音を響かせていた。

その雨の中を紺色のジーパンに、黒の薄手のブレザーを羽織った長身の男が、沢木洋介の部屋を訪ねてきた。

洋介がドアを開けると部屋の前に居た男は、洋介を見て、昔、そうであったように軽く右手を挙げ「よう」と短い声を上げだ。

髪を長く伸ばし髭を蓄えた風貌に変わってはいたが、男は田之上孝作であった。一瞬、洋介は驚いたが無意識のうちに、洋介も当時、いつもしていたように口元に、軽い笑みを浮かべた会釈をしていた。

元々学生の時から田之上は、痩せた体をしてしたが、更に痩せたように見えた。田之上と会うのは、洋介にしても十数年振りとなる。風貌は大分変わった感がある、それでも田之上を前にすると不思議と、それほど長く会ってなかったとの印象は起きなかった。

その田之上は洋介に断るでもなく、ドアのそばに立っていた洋介の体を押しやるようにして、そのまま部屋に入ってきた。その仕草は昔とちっとも変わってなかった。洋介は、田之上が部屋に上がると、仕方ないと苦笑いを浮かべドアを閉めた。

それにしても朝から大変な一日であつた。しかも、それは城島が話した七月七日に起きている。その中での田之上の訪問であれば、偶然などあり得ないのは洋介にもわかつていた。それだけに洋介にも多少の警戒心はあつた。

「しばらくだな、沢木君」

肩についた水滴を払うよう二度、三度、肩の上で手を動かしながら、田之上が口を開いた。

「そうですね、しばらく振りです」

お互いに挨拶は、それだけであつた。田之上はテーブルの前に腰を下ろすと、洋介が座るのも見ないで切り出した。

「世間が騒がしいな。沢木君は、この騒ぎをどのように思う」

そんな田之上を洋介は、ちらりと見ながら田之上の正面に座つた。

二人が並ぶと洋介は、田之上よりずっと若く見えた。長目の髪に大きめの二重の目、少し丸みを帯びた輪郭が、実際の年よりも若く見せているのかも知れない。その容姿からは一見すると穏和とも気弱とも見えるものがあつた。

「何をする気ですか、まったく」と呆れたように、洋介が少しと目を怒らせて言うと、「どうやら、僕の作ったホームページは見てくれたようだな」と、田之上は口元に笑いを浮かべながら話した。

「見ましたよ」

「だったら話は早い。日本の大掃除をする」

「それは田之上さんが、今回の首謀者だという事ですか？」

「そう、僕だよ」

「それだったら忙しい最中で、こんな場所に来ている暇は無いでしょう？」

「別に忙しくはない。すべき事は済んでいる。——そうだな。僕は自分を天才だと思っている。いや、天才だな。違うか？」

そう言うと田之上は、ニヤリと笑って見せた。たしかに田之上は自他共に認める天才である。そう問われれば、洋介とて認めない訳にはいかない。素直に頷いた。

「その僕が、これまで唯一認めた人間が居る。それが君だ。どうだ。僕と組んで国を変えてみないか？」

国を変えろという突然の話に、洋介は戸惑った。洋介の知る田之上は昔から、好い加減な事や冗談を口にする男ではなかった。田之上は柔らかい表情を見せてはいるが、その目は決して笑ってはいなかった。

「俺に、その気持ちはありませんよ」

当惑気味に顔を曇らせたまま、洋介がはっきりと答えた。

「そうか、まあ、僕と君が組めば世界一の国を作る事もできるのに残念だ」

「世界とは大きくでましたね」

「僕は案外本気だよ」

「俺に、世界をどうしようとの気はありません」

「話を聞く前からの断りか、ただな、君の気持ちに関わらず何れ君は、この騒動に関わってくる」

「勝手に決めないでください。何故、そんな物騒なものに関わる必要があるんですか？」
少々不機嫌そうに洋介が答えた。

「本州に頭の切れる人間は居ない。困るんだよ。頭の悪い人間の選択は戦うだけだ。同じ

戦うにしても、頭の悪い連中は無茶をする。それでは僕が疲れる。君が本州の先頭にたてば本州は、僕と同じレベルの考えで戦える」

「訳の判らない事を、言わないでください」

これから戦いをしようとする相手の力不足を、嘆きは正して行くような話に、田之上の考えが洋介には理解できなかった。

「そうかな、僕はストーリーを描ける立場にある。今回の騒動に君の登場を書き入れる事など容易だ。この件から逃げる事はできないぞ、沢木君」

そう言うと田之上は一重瞼の切れ長の目を細め、再び、ニヤリと笑った。田之上が独断的に語るときに出る、いつもの笑いと知っているだけに、洋介には嫌な笑いに映った。

「僕が四国独立の首謀者だと話した。それだけでも君の中立性は失われたとは思わないか？」

田之上が勝手に話したとはいえ、日本中を混乱に陥れている首謀者が、田之上であることが知ったからには、その意味に於いて多少の関わりを持つだろう。しかし、それ以上の関わりは御免であった。

「これだけじゃあ、返事のしようもないか？　では何から話そう、そうだな四国を治めた事から話そうか？　行政、警察、自衛隊、民衆、全て僕に付けてくれたよ」

これまでの報道からしても、四国に新たな勢力が作られたとは感じていたが、それでも田之上本人の口から、全てまとめたと話されれば、少なからず洋介にしても驚きがあった。「それは武力で制圧したとの意味ですか？」

「武力での制圧、そんな野蠻やばんな事はしない。君ならわかるだろう。人は誰しもが力に恐れを持つ。だったら、そこに君臨くんりんしている頭株を抑えれば、人は後についてくるものさ」

「頭株とは地方議会ですか？　それとも……」

「そう、それともこのほうだ。長いこと戦いを忘れた日本人は一番の力は権力と勘違いをしている。しかし、それは間違いだ。いざとなれば実際は直接武器を持っているところが強いに決まっている。日本では自衛隊だ。だから、四国の自衛隊を最初に抑えた」

四

田之上の話によれば、田之上が開発した水素個圧燃料は兵器の性能を飛躍的に伸ばせる

ものとして、軍事関係者の間でも注目されていた。そのため田之上の名前は自衛隊幹部の間でも知られた存在であった。それらの下地を使い自衛隊幹部に近づくと、自らが資金を提供するのを条件に、自衛隊から練習機一機を提供させ、その練習機を水素個圧燃料仕様やステルス化などにより、高性能戦闘機に作り変える約束をしたと語った。

「よく自衛隊が田之上さんの話に乗りましたね」

「簡単な事だよ。自衛隊は戦うための集団、その集団に取って強力な武器を得るのは自らの身を守る事につながる。常に強力な武器を持ちたいと願う自衛隊幹部に、愛国心をちらつかせ、僕の資金で開発を約束すれば、練習機の一程度は目をつぶって提供する」

話の内容はクーデターとも言える、際どいものであった。しかし、不思議と二人の話す姿からは緊張や緊迫感というものは伝わってこない。

田之上にしても自らが大変な事をしているとの感覚や、殊更に真剣という感じもなく、時には薄ら笑いを浮かべながら語る。それを、また洋介も当然のように淡々と受け止める。「所詮、そのようなものだ。古い練習機一台がどのようになろうとも、閉ざされた組織内では幾らでも隠蔽できる。それより、もし、その古い練習機が、僕が話したように高性能

な戦闘機に生まれ変われば、その組織のお手柄。そのように地方の幹部が考えたとしても、おかしくはないだろう」

いや、そのように田之上が上手く話を持っていったのだろう。

「地方の自衛隊幹部は、それを中央に報告しなかったのですか？」

「生まれ変わる戦闘機を見届けないと、出来ないな」

完成品を見れば飛ばしたくなるのも人情である。田之上は地方幹部に本州に、改造した戦闘機を飛ばす事を進言したと述べた。田之上の作ったものである。本州側のレーダーなどに写るものではない。その時の地方自衛隊幹部の驚いた姿は、洋介にも容易に想像がついた。

「戦闘機の改良などは単なる取っ掛かり。何事も、一つ成功させ相手を信用させる事ができれば、組織が大きければ大きいほどに幾らでも食い込める。僕は戦闘機の改造が終わると、今度は四国の橋の上に居る騎兵隊を見せたよ」

信用を得て、次なる物で興味を引き、中央への報告に待ったをかけさせる。うまい方法であった。

「僕は、騎兵隊の性能を知って貰うために四国の山の中で、自衛隊と騎兵隊の模擬戦闘もぎせんとうをする事にした」

「それにも自衛隊は応じてしまった……」

「応じるほかないだろう。僕の話した能力が騎兵隊にあるとなれば、そんな物騒な物が海外に持ち出されたら、今度は自衛隊に取っての脅威に変わる。地方の幹部とは云え自衛隊幹部なら確かめずには居られないのは当然だろう」

「たしかに、そうかも知れませんか。そして結果は田之上さんの勝ちですね」

「ああ、模擬弾を使った戦闘に騎兵隊一騎を投入し、自衛隊側戦車B中隊を八分で倒して見せた。さすがに、これには自衛隊幹部も度肝を抜かれたようだった。僕には、それが幹部達の恐怖として伝わってきたよ」

田之上は最初から自衛隊との模擬戦闘を逆手に、自衛隊に対して脅しをかけていた。そのとき田之上は実戦配備できる騎兵隊が、百騎以上ある事を自衛隊幹部に告げていた。戦車に簡単に勝つ事のできる騎兵隊が百騎となつては、自衛隊幹部が狼狽するのも当然であつた。

「ただ、僕は、騎兵隊をお国のために、そっくり自衛隊に差し上げる事を、その場で約束したよ」

「狼狽していた自衛隊幹部は、喜んだでしょうね」

「ああ、喜んだ。自分達に対する脅威が取り除かれたばかりか、強力な戦闘兵器を手にするのだから」

「……只ほど高い物はないのに」

「そう、冷静になれば自衛隊幹部も、その事に気づく。騎兵隊に搭載した多段式ガス銃は、勝手に僕が作ったもの。日本の法律では密造銃となるんだろ。いくら優秀な武器であつても、法律に違反してはアウト。そうなつたら、おいそれと中央の自衛隊幹部に報告はできないよな」

「仕掛けましたね」

田之上は、少し冷たい目をしたまま微笑んだ。

「自衛隊幹部も困つたのだらうな。——僕にも相談がきましたよ。その時点で騎兵隊を扱えるのは、僕とその仲間達、当然騎兵隊提供と同時に僕達は、自衛隊の軍事顧問ぐんじこもんとしての

地位を得ていたからね」

「それで、どうしたのですか？」

「貴方の力はすでに中央を超えている。中央に気遣いはいらんでしよう」と話した」

「地方の幹部に自信を与えた……」

「そう、人間には醜い欲があるからね。自信さえつけさせれば、自然とその欲望が頭を持ち上げる」

うーんと洋介は唸った。騎兵隊百騎。騎兵隊一騎なら倉庫の片隅にでも仕舞っておける。一騎なら使い道が限定されるため、無理に使おうとは考えない。ところが百騎揃えば、使って見たいとの欲望にかられる。

「計算してましたね」

その言葉に、田之上は薄ら笑いを返して言葉を続けた。

「百騎の騎兵隊は何処に隠したところで隊員の噂になる。なにしろ模擬戦に参加した隊員が大勢いる。これだけ有効な武器を活用しないとすれば、隊員から幹部に対して不満がある。そんな事は戦う集団であれば当然だ。しかしな、騎兵隊百騎は何も隊員の欲望だけを

かき立てるだけのものではない。地方の自衛隊と中央の自衛隊の間に楔を打ち込むためには、まとまった数がどうしても必要だった。一騎や二騎では駄目だ。何とでも言いつくる。しかし、中央に内緒で百騎もの騎兵隊を集めたとなれば、言い逃れなどできない」

口では簡単に言うが、おそらく田之上の事である。中央に報告のできない状況を確実に作つたうえで隠しておけない数の騎兵隊を与え、地方自衛隊幹部を窮地に落とす。ただ、それが強力な武器であるために与えられた地方自衛隊幹部が、窮地に落ちたと考えるより、新たな道を切り開くための喜びとして捉えるように、言葉巧みに仕向けたから成就したのであろう。

「結局、自衛隊は田之上さんのマインドコントロールにかかった」

「それは否定しない。しかし、マインドコントロールは所詮、その者が物欲や権力欲などに取り付かれていないと使えない。君のようにかけられない人間もいる。能力を持ちながら、今は農業機械の開発か？ 欲のない男だ」

「俺の事も調べたのですか？」

少し呆れながら田之上を見た洋介ではあったが、自分の話に及んだのをきっかけに、そ

のまま立ち上がると炊事場からコーヒーカップを二つ用意して、コーヒーを入れ出した。

五

洋介がコーヒーを入れる後ろ姿を、しばらくは見ていた田之上であったが、じきに、その後ろ姿に向かって話を続けた。

「調べたよ、大学を卒業すると農水省キャリア技官として入省、四年後に官僚制度に疑問を呈し退職。君の能力に早くから目を付けていた大手農機メーカーにひっぱりだこ、そこに就職、現在は農業機械の開発に従事する。……残念だよ。君には、もっと大きな事をして欲しかったな」

「別に組織に疑問を持ったから辞めたのではないですよ。それに結構、今の仕事に満足をしています」とカップに、お湯を注ぎながら洋介が話した。

「君の満足など聞いてはいない。そりゃ、僕だって農業の大切さは知っている。しかし、それは君がやらなくても違う人間にもできる。僕が言いたいのは君には、君だけしか出来ない物があるだろうという事だ」

そこまで田之上が話したとき、コーヒーを入れ終えた洋介が、田之上の言葉を遮るよ
うにコーヒーを差し出した。

「インスタントのコーヒーしか有りませんが構いませんか？」

「構わんよ。僕は、インスタントコーヒーは好きだよ」

田之上は前に置かれたコーヒーカップを、手にすると口に運んだ。

「うまいな、このコーヒー」

田之上はコーヒーを啜りながら、笑いを浮かべた。

事業を成功させ、大金持ちとなった田之上である。今でもインスタントコーヒーを、飲んで
いるとは思えなかったが、こうしてインスタントコーヒーをうまそうに啜る姿は、昔
とちっとも変わっていなかった。見れば服装にしてもよれたジーンズに、高価とも思えな
いブレザーを羽織っただけである。その姿に、洋介は何か安心感を覚えた。

「……俺の事はいいです。自衛隊を治めたのはわかりましたが、そこから地方自治へは、
どのような方法を使ったのですか？」

別に難しくはなかったと田之上は話した。自衛隊という武装集団と田之上の持つ、強力

な武器、それを前にすれば逆らえるものではない。その状態で、中央より遙かに地方の軍事力が上になったと実感させ、後は中央に頭を下げているより自分達で国を治めると暗示すれば、地方の代議士であろうとも代議士は代議士、権力の座に座りたいのに変わりはない。反対する理由はない。

田之上は、時々コーヒをすすりながら話を続けた。

「ただな、権力だけで片付けるのも可哀想だから話すが、元々地方の代議士には中央に反乱する下地があつたんだよ。官僚をしていた君なら僕が、何をいわんとしているか判るだろう」

これまで日本は、あまりに中央官庁の権力が強すぎて、地方をないがしろにしていた。地方分権が叫ばれて久しいが、利権を放したくない中央官庁が、頑として反対をする。地方税の分配や公共事業に対する分担金の制度なども然り、地方に対して権力を残したいがために、色々な細工をする。奴属のように扱う中央のやり方に地方は嫌気がさしていた。それでも如何せん国に逆らえば、交付金をカットしたり、目に見えないところでの締め付けが行われる。それがあつたために、地方は表面的には国に素直に従うほかなかつた。おそ

らく田之上の言おうとしたのは、その様な事なのであろうと洋介は頷いた。

自治体を運営するに事欠かない資金、資金調達の青写真さえしっかりとしていれば地方は、何も、国の言いなりになる必要はなくなる。

「だから官僚を辞めたのではないのか？」

「違いますよ。俺は、別に官僚組織を嫌って辞めた訳ではありませんよ。単に上司とそりが合わなかった。ただ、それだけですよ」

「果たしてそうかな、同じだよ、君も僕も根底にある考えは、ただ、君は逃げた」

洋介は顔には出さなかったが、そう言われた時、何か、胸を突き刺されるようなものがあった。官僚組織を変えたい。その思いが上司との衝突となり結果的には退職となった。

どのような形であれ、目的を達する事なく、そこを去ったとの意味では逃げたと言われども仕方ないものがあった。

「逃げたら、逃げたでも構いません。それより、簡単に地方だけで生きてはいけませんよ」

自分の話を打ち切るように、洋介が言った。

「できるさ、四国は農業、漁業県だよ。自給自足に堪えられる。人間は食べる、寝る、子孫を残す。基本は、この三つがあれば事足りる。その三つをクリアできれば良いだけだろう」

「食うとは、単に食料があるだけの問題ではないですよ」

「そうだね。経済も大切。僕は、色々な所にコネクションを持つ。それは何も前に住んでいたアメリカだけではない。僕の作った会社はアジア、ヨーロッパ、中東、世界に広がっている。水素個圧燃料の特許、これも四国に与える事にした。そこまで条件を整えてやれば、誰だって自分達の事は自分達で決めたいと思うよ」

そうであったかと洋介は思った。水素個圧燃料があれば、四国程度の経済はどうにでもなる。先を見据え色々な国に手を打ってあれば、貿易もすぐに始められる。

「ただ、間違えるなよ、僕の協力などは取るに足りない。本質は、そんなところにはない。今や、地方は疲弊している。四国地区でも何れ破綻するような自治体もでてくる。自治体の職員なら、それは誰でも意識をしている。しかし、そのとき中央が手を差し伸べるか？ノーだよ。中央は、いざとなれば自らの長年にわたる指導の誤りなど問う事もなく、地

方の自己責任にする。事実、北海道に破綻した自治体がある。破綻した自治体の姿を自治に関わる人々も見ているから、地方は中央に見殺しにされるとわかっている。それがなければ、僕の言葉などに簡単についてくるものではない」

地方の崩壊、それは今や現実のものである。他人事で済まない現実を地方の自治体に携わる者であれば、誰もが感じている。その中央行政への不満を巧みに利用して田之上は地方行政組織まで取り込んでいた。

六

「ここまで、すでに終わっている。どうだ、これでも気が変わらないか？」

田之上が再び正面から洋介を見て言った。

「たしかに、国は色々の問題を抱えています。俺だって、今の政治や行政に何の不満もない訳ではありません。しかし、だからと言って武力によって変えるのは間違っています」

「じゃあ、君に聞くが、いつまで待ったら政治は国民のための政治になると思う。日本は無理だよ。官軍上がりの”おい”、”こら”で始まった明治政府からの、お上に従えの体質

は、今も本質的には変わってない。まして、ここまで肥大化した官僚組織を、省益優先の官僚が自ら断ち切れると思うか、それとも政治家の先生に君は期待するか？ 無理なんだよ。一番てっとり早い方法は力だよ」

「殺し合いになります。報復が報復を生み、良い結果など生みませんよ」

「おい、おい、そう一方的に決めるなよ。僕は確かに武器は用意した。しかし、その武器を使うとは、まだ言っていない」

少し訝しげに洋介は、田之上をみた。

「四国を独立させるのに武器は必要だ。しかし、武器が必要な事と、その武器を実際に使うかは別問題だ。武器は見せかけでもよい。核兵器がそうだろう。おいそれと使えないが、持っている事により抑止力になる」

「では田之上さんも、武器は脅しだというのですか？」

「まあ、僕のなかでは、そのように考えている。ただな、相手がある事だ。武器は使わないう方が良いが、使わないとの断言はしない。理想を述べて、自らの手足を縛る考えは僕にはない」

「それだったら、田之上さんの言葉は言い逃れです。やはり、最後は武力で決まりますよ」

「なら、言い方を変えよう。少なくとも僕の方から日本政府に対して、攻撃を仕掛ける考えは無いと断言しておく。これでどうだ」

「日本の出方次第という事ですか？」

「そうだ、日本政府が何もしなければ、僕も何もしない」

「同じ事です。日本政府は黙っていません。結局は戦いです」

「そんなに戦いはいやか？」

「ええ、嫌です。どんな理由で有ろうと戦いをすれば人が死ぬ。こんな馬鹿げたものはないです」

「それが国民の為であろうとも？」

「死んでいく人間にとっては、後の国家が何になるのですか、人間、死んでしまったら終わりです。そうでしょう。生きている現在の方が、遙かに大切な筈です」

「大多数の幸福、そのための犠牲だ」

「過去の戦争も、そのような言い訳で成り立っています。田之上さんとは思えない言葉です」

「まあ、ここで戦争論議を始めても仕方ない」

「それは、そうです。ともかく俺は、訳の判らない事で人が死ぬのは嫌ですから」

「人は殺さないと言ってもか？」

「戦争となったら、そんな都合良くはいきませんよ」

「どうかな」と言つて、田之上は薄ら笑いを浮かべたが、それ以上は突き詰めた話には及ばなかった。洋介にしても、最初から、戦争で人が死なないというのは無理だとして聞いていたので、その話を掘り下げようとの気持ちにもなれなかった。

少し二人の間で言葉が途絶えた。

七

洋介は、駄目だというように頭を振った。それを田之上は少し寂しげな目で見ていた。

洋介と田之上は幾度となく、学生の時に激しい議論をした間柄である。見かけは柔に見

える洋介であるが、その芯の強さは田之上も知っている。

「どうやら君は、考えを変える気はなさそうだな」

洋介が、正面から田之上の目を見て頷いた。田之上の表情が、このときだけは真顔であった。黙った洋介をしばらくじっと見ていた田之上であったが、「そうかと」小さく自分を納得させるように頷くと、「結論は出た。今日から君は、僕の敵だ。敵に成ったからは早速、仕事をしてもらう」と言った。

「敵も味方も無いです。俺は首を挟んだりしませんよ」

「言い訳はするなよ。さっき話した。君にはメッセンジャとしての役目があると」

「……だいたい、そのメッセンジャとは何ですか？」

「君の知り得た事や考えを、日本政府に伝えるのが役目かな」

「それだと田之上さんが首謀者だと、日本政府に話しても構わない事になります」

「それがメッセンジャとしての役割だろう」

田之上は当然のように言った。首謀者を自ら明かしてくる。いかにも自信家である田之上らしかった。それにしても、その真意は何処にあるのかと、洋介は探るような目で田之

上をみた。

「僕だって、人は殺したくない。いや理想を言えば無血で望を叶えたい。しかしな、日本政府の馬鹿者どもが相手では、幾らでも血が流れる」

「それが武力の行き着く先ですからね」

「そう、そこが重要なんだよ。殺された側の人間はいつまでも恨みに思う。そのような人間が増せば四国を独立させたところで、日本からの反発はいつまでも消えない。だから、僕は、人を殺さないと決めた」

「田之上さんは戦いを避けたいのですか？」

「出来れば、そうしたい。しかし、残念だけど日本政府に戦いを避けようとの意志は働かないだろう。なにしろ権力に固着する集団だ。そうなれば、こっちも対抗上戦わざる得ない。けどな、はっきり言っておくけど僕は強いよ。日本が何度仕掛けてきても、それを跳ね返す。しかし、その度、日本に犠牲者がでるのは気の毒だろう」

話の趣旨から察すれば、日本政府と正面から武力衝突を起こして、独立を勝ち取ろうとの意図はないようであった。跳ね返すと言っていることから、田之上の頭には長期戦を

模索している様子がうかがえた。

「……田之上さんは四国を独立させた後、日本と手を結ぶ気はあるのですか？」

「勿論ある。四国ほどの小さな国で何ができる。日本と手を携えて共に世界に向かっていくのが僕の構想。そのため僕は、無益な殺生はしたくない。ただな、それには自ずと限界がある。馬鹿者達は無茶をしてくる。無茶はいかん。日本に僕同等の能力のある人間が居れば、無茶は起きない。君が敵になるのなら、無茶を押しさえる役目くらい担えよ」

田之上らしい身勝手な話してあった。

「僕は今、本州と四国が陸続きとなる三つの橋に、僕の作った騎兵隊を配置している」
洋介がうなずいた。

「僕の作った騎兵隊の動力が何か知っているな」

「水素個圧燃料……」

「それが、どんな物であるかも知っているな」

田之上が何を言いたいのか、洋介は探るような目で田之上をみた。

「……………そういう事ですか」

その言葉に田之上が、そうだと頷き言葉を続けた。

「君なら、あれを自衛隊が攻撃したら、どのような結果になるか想像がつくだろう」

強力な動力源、例えば核分裂、一瞬で、その持っているエネルギーを解き放つように作られたのが原子爆弾であり、制御によって徐々にエネルギーを取り出す為に作られたのが原子力発電所である。水素個圧燃料も同じである。強力なエネルギー源であれば一瞬で、そのエネルギーが解き放された場合は大きな破壊力をもたらす。要は騎兵隊に、一瞬で全てのエネルギーを解き放す仕組みが体内に組み込まれていれば、それは強力な破壊力を伴うのであった。

「そのような事まで話して、構わないのですか？」

「問題ない。君に話せば政府に伝わる。城島という男は君の友達だろう」

驚いたように洋介が田之上をみた。

「長い事、僕を調べていた。なかなか勘の鋭い男のようだな。——彼は警察、それも公安の人間、そして今は政府に居るんだろう」

城島の話に及ぶと洋介の表情は、俄にわかに真剣になった。いくら、田之上が、ここで何を

話そうが洋介が政府と無縁で有れば、話がすんなり政府に伝わるものではない。しかし、田之上が城島と洋介の関係を知っていたとなると話は別であった。ここで話した事は城島を通じ政府に伝わる。それを見越して田之上は話しているのであった。

「コーヒーのお礼だ、もう一つ、ヒントをやろう。――僕のホームページをもう一度、読むことだ」

「そこに、何かあるのですか？」

「ヒントだと言った。それを考えるのは沢木君だ」

「……………」

ホームページに書かれていたのは楠田新政権誕生の予測と、今回の事件を示唆する意味合い的なものであった。その何処に何があるのかと、洋介は訝しく思った。

『異端視の夏』 試し読みでした。

「ここまで、おつきあいありがとうございました。

